

## 4. 門前大市の変容と現状

横尾 和

- |             |            |
|-------------|------------|
| 1. はじめに     | 4. 門前大市の現在 |
| 2. 門前大市について | 5. 考察      |
| 3. かつての門前大市 | 6. おわりに    |

### 1. はじめに

今回の調査では、輪島市門前町門前地区にお伺いした。聞き取り調査の中で、「門前大市」について知り、総持寺の宗教行事をきっかけとしたこの大市は、門前ならではのことができるのではないかと考え、今回の調査では大市の変遷やその性質、現在の姿などを明らかにし、門前大市が門前の人々にとって、どのような役割を果たしているのかということについて検討していきたい。

### 2. 門前大市について

まず、この章では、今回題材とする門前大市がどのようなものかを文献資料をもとにその概要について記していく。

#### 2.1 起源について

『門前町史』（1970：322-327）によると、「門前大市」は、古くは「放生市」と呼ばれていた。旧藩時代に毎年陰暦8月15日に総持寺で行われていた輪住交代時上堂式に参加するために集まる僧侶や民衆を対象として翌16日から7日間の市を催したのが始まりとされている。「能奥の地は、従来とも交通の便がわるく、日常必須の諸道具といえども供給の途がなく、したがって、常設店舗の発達も期待されなかったので、年1回定期大市をひらいて生活物資の補充をする必要があった。この意味からは、門前ばかりでなく、輪島、富来、宇出津、羽咋、七尾、の各町々もそうであったが、門前の場合、それが放生会を機会に開催されたのが始まりである」と記されている。付け加えると、放生市のホウジョウは仏語の「放生」から出ているとしているが、仏教において「放生」とは「捕えた虫・魚、動物などの生き物を解き放って自由にする」という意味であり、「放生会」はこの法会のことである（『岩波仏教事典 第二版』）。なお、この輪住交代時上堂式は総持寺を開山した瑩山禪師が遷化した日、8月15日に行われ、今でも総持寺は同様の日程で「御征忌」を行っている。一方、『新修門前町史』（2005：128-130）においては「以前は十月大市と称して十月一日～六日までの六日間、最近は同七日～十一日までの四日間にわたり大売り出しが行われた。これは元々九月の本山の御忌の日である」「門前町には秋に総持寺のホウジョウウエという大規模な法要が行われ、その折にホウジョウ市が開かれた。また年間を通じた定期

市があった。かつて人々は日用品の一年分をこうした市日に買い求めるが、特に稲刈りの収穫期が終わった十月十日の市は賑わい、陶磁器の茶碗や唐傘、鍋、釜などの金物を売る露天商をはじめ、植木などの鉢物および飲食品を売る露天商が大勢集まった」と記している。また、佃和雄『能登總持寺物語』（1996：189-191）では、「放生市」は毎年八月下旬の輪島市重蔵神社の夏祭りを中心に一週間、富山・高岡・名古屋・大阪などからの商人が「お斉市」が開設され、これを皮切りに奥能登の主要祭日を中心に、それぞれ一週間程度の日程で巡回する定期市が開催され、これが門前町で行われるときに「ホウジョウ」と呼ばれていたのだとしたうえで、もともと「本市」という地名などからもわかるように市が開かれていたのが、総持寺が建立され、その寺口に街並みができてからは、市がこの寺口で総持寺の行事に合わせて開かれるようになったのではないかとしており、「放生市」については、「総持寺では毎年八月十五日（陰暦）太祖大師の御征忌の際、放生会が営まれたが、その参詣に集まった善男善女をめあてに、翌日の十六日から一週間、総持寺門前の寺口で開かれた市が、今日の『放生市』に発展したものとおもわれる」と記されている。

なお、門前地区門前区の保管する文書を見てみると、門前大市は「放生市」という名称のほかにも、「例歳雑具大市」「雑具市」「寺口市」「市街市」「臨時市」といった名称が見られ、名称の統一はなされておらず、様々な呼称が存在していたことがわかった。

## 2.2 開催時期について

門前大市の開催時期において、大きなポイントとなったのは総持寺の輪住交代時上堂式と農繁期との兼ね合いである。総持寺ではかつて 1868(明治元)年に輪住制が廃止されたことによって、輪住交代時上堂式がなくなった後も、放生市は存続した。しかし、それ以降、開催時期は時代によって、たびたび変更されている。『門前町史』（1970：322-323）では、明治の初めには 9 月 16 日から、明治中頃も記録では 9 月下旬が多く、昭和初期には門前のチフスの大流行を機に十月初旬に開催されるようになったとされている。『能登総持寺物語』（1996：189-191）においては、1898（明治 31）年の大火による伽藍の焼失・1908（明治 41）年の鶴見への移転によって、寺口の往時の賑わいがなくなると、大市が総持寺の行事とは関係のない時期に開催されるようになり、結果、奥能登一円に展開される定期市の一つの日程に繰り込まれたことによって、10 月上旬に開催されるようになったとされている。10 月上旬になったタイミングに関しては、門前区が保管する 1921（大正 10）年の「通知書」において、「大市ハ本年ヨリ毎年拾月 1 日ヨリ全七日迄壹週間ト定ム」と記されており、1922 年を境に 10 月 1 日開催になったことが明らかとなった。なお、1922（大正 11）年、1924（大正 13）年についても同様の「通知書」が確認でき、1922 年と 1924 年の「通知書」中では、前年と同様に十月一日から七日までの七日間のうちに開催する旨が記されている。このことから、少なくとも 1921 年から 1923 年の間は十月一日から七日の開催期間であったことは確かだといえる。「能登門前新そばまつり & 門前大市」となった現在でも、11 月に開催されている。このように開催時期の変遷を追っていくと、門前における大市は、上でも指摘した通り、宗教とは分離された年中行事として独立したものとして人々に捉えられ

ていると推測することができる。

## 2.3 開催場所について

開催場所についても、当時の交通状況などを受けて、時代によって異なる。従来は、総持寺の門の前に始まる堅町で開かれていたが、1954（昭和 29）年に堅町通りが国道 249 号線になったのを機に横町での開かれるようになり、さらに総持寺通りでの開催となった。一方で、のちにも触れる、『広報もんぜん』における記述からは、大市に際して交通規制が行われ、歩行者天国になったことがわかる。なお、門前区保管の 1844（明治 17）年、1845（明治 18）年、1846（明治 19）年、1897（明治 30）年の「市街仮店願」に添付されている地図を見てみると、堅町と横町の両方に出店していたことがわかり、堅町・横町のどちらかで開催というのではなく、その両方で店が出されていた時期もあったようである。加えて、1952（昭和 27）年に作成されたとされる、石川県知事に向けた「道路一時占有願」が残されており、これによると、10 月 6 日～13 日の 8 日間、富来線を約四百メートルにわたって大市のために道路を占有する旨が記されている。

## 2.4 出店店舗について

出店店舗については、『門前町史』（1970：325）では 1949（昭和 24）年と 1966（昭和 41）から 1968（昭和 43）年の大市の店舗数比較表が掲載されており、文中では交通事情の急激な進展・高度経済成長による住民の生活様式の変化により、需要の激変が懸念されたが、かえって、商品内容が多彩になり、店舗数が漸増したとし、かつ、以前は大市では生活必需品の購入が行われていたのに対し、自家用車などが普及すると、それらの年次補給は大市でする必要がなくなったために「生活が高度化し多様化してきた現在の商品は、生活用品といえども、文化的により高度な専門品になりつつあるといえよう」と結論付けている。これらの記述からは、『門前町史』（1970：324-325）当時にも、すでに門前大市の役割は生活必需品の購入ではなくなっていることがわかる。

なお、門前の人々は商人に「高店」あるいは「下店」を貸与したという。「高店」とは、道路に面した家屋店舗であり、「下店」とは家屋前の道端に建造した仮店のことである。「通知書」の記録によって、この店賃は、1921 年では一間当たり「高店」が四円五十銭、「下店」が三円五十銭、1922 年では「高店」五円、「下店」四円、1924 年には「高店」五円、「下店」四円であったことが確認できた。また、「通知書」には店賃のほかに店主か家主から「市賦金」が徴収されていたことがわかった。1924 年の「通知書」には、市賦金の金額は一間あたり「高店」四十銭、「下店」三十銭とされており、「前年ノ通り」とも記されていることから、少なくともこの前年は同様の金額であったことが推測される。

ほかに聞き取り調査においても出店店舗に関する情報が得られたほか、『広報もんぜん』においても関連記述がみられるが、のちの章で言及するため、ここでは割愛する。

## 2.5 見世物について

『図説門前町の歴史』（2004：98-99）によると、大市の期間中には、サーカスや芝居、幻灯などの見世物もあったという。また、中でも、荒瀬の川原で行われていた相撲は特に

人気があり、近郊町村の力士を招いて開催されていたそうで、ここで相撲を取ることは力士にとって最高の名誉ともいう。なお、この相撲については力士集めが困難になったことから昭和 30 年代初めに打ち切られたそうである。今日の「門前大市」においてもステージでパフォーマンスが行われているが、のちの章において言及したい。

## 2.6 門前大市に関するまとめ

以上の門前大市・放生市の記述を整理すると、今日に伝わる門前大市は、かつては総持寺の輪住交代時上堂式の際に行われた放生会に参加する人々を対象とした市で、そのことから「ハウジョウ市」とかつて呼ばれていた。また、奥能登を巡回する定期市の一部であった、あるいは途中でその日程のうちに組み込まれるようになった。きっかけこそ、総持寺の宗教的な行事ではあったものの、門前大市は、のちに述べるようにその内容や果たしている役割に関して言えば、宗教と深い関係にあるとは言い難く、交通の便の悪かった奥能登において、人々の商品入手の場として機能してきたことがわかる。次章においては、聞き取り調査及び広報における記述などをもとに、戦後の大市について特に着目して述べていきたい。

## 3. かつての門前大市の様子

### 3.1 聞き取り調査での明らかになった大市

門前大市に関連する聞き取り調査では、門前大市の参加した方々の声をお聞きすることができ、かつての大市の役割やその様子、参加者にとっての大市について垣間見ることができた。以下に聞き取り調査で明らかになったことを述べる。D さん（本市、男性、70 歳代）によると、大市は交通の悪い頃、年に 1 回 11 月に行われており、七尾、穴水では現在も行われているが、今では、門前ではそば祭りとそばの市を兼ねてやるようになった。堅町通りに露店が立ち並び、日用雑貨、服、おもちゃ、茶碗など、1 年間の日用品を買うための市であり、かつては門前に住む人が総出になる市だったという。M さん（門前、女性、80 歳代）は、子供の頃、大市が楽しみで、欲しいものがあつたら、大市まで我慢したという。Y さん（門前、女性、70 歳代）によると、大市で、長靴、衣料品、かっぱ、バケツ、そう桶（竹で編んだもの）、かま、桑、なた、農機具などといった冬の支度をそろえていたという。他にも、たこ焼きや飴、射的の露店があり、泊りで市に一般家庭でも受け入れていたという。

このように、かつて、門前大市は今まで指摘してきたように、日用品の買い物の場、特に冬支度の場として、門前の人々に必需の存在であり、かつ、子供たちにとっては格好の遊びのイベントであったことがよく分かった。

### 3.2 『広報もんぜん』に見る「放生市」の様子

また、旧門前町が発行していた『広報もんぜん』の中の記事からも、当時の門前大市の様子をうかがうことができる<sup>2</sup>。『広報もんぜん』では、年によって記事の規模は異なる

---

<sup>2</sup> 『広報もんぜん』では、一貫して、「放生市」の名称が用いられている。



ものの、1987（昭和 62）年から 1995（平成 7）年までは、冬の風物詩・恒例行事として、毎年 11 月

号にて門前大市の様子が紹介されている。なお、1993（平成 5）年には、「放生市」に関する記述はみられなかったため割愛している。以下に、『広報もんぜん』中の記事をもとに、見出し、開催日、市の様子に関する情報をまとめた表を記す。

表 1 『広報もんぜん』における「放生市」関連の記事内容のまとめ

1987（昭和 62）年	
見出し	「放生市」
開催日	10 月 7 日～11 日
出店店舗	中央商店会や県移動商業協同組合の露店 約 80 軒（衣料品・履物・陶磁器・おもちゃ・綿菓子・たこ焼き・金魚すくい等）
市の様子について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・10 日、11 日は好天に恵まれ、人手が多かったのにもかかわらず、店の売りに上げには関係がなかったようである</li> <li>・「放生市は、年間の必需品を買い求める往時の目的はなくなり、家族とショッピングを楽しむ行事に変わった。」</li> </ul>
1988（昭和 63）年	
見出し	「路上のデパート 放生市」
開催日	10 月 7 日～11 日
出店店舗	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地元振興会の商店</li> <li>・県移動商業協同組合の露天商 約 60 軒（衣料品・履物・陶磁器類・金物・植木鉢・日用雑貨・おもちゃ・たこ焼き・ホットドック・綿菓子・金魚すくい等）</li> </ul>
市の様子について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・好天の上、9 日は日曜日、10 日は体育の日であったため、賑わっていた。</li> <li>・しかし、体育の日は自粛ムードであり、天候による農作業の遅れもあって、人手が例年に比べると少なく、売り上げも期待外れであったと露天商の方がこぼしていたという。</li> <li>・以前は一年間に使う茶わんや皿など大量に買い求める人が多かったが、そのような買い方をする人はいないとのコメントがされている。</li> </ul>
備考	<ul style="list-style-type: none"> <li>・記事の最後には「今年は地元商店街の皆さんも年間最も人出の多いこの行事を、商店街活性化への機会にと、積極的</li> </ul>

	<p>にいろいろな取り組みをしていました。」と記載されており、具体的な内容こそ、わからないものの、それまでの大市とは違ったものにしようという気運があったことがうかがえる。</p> <p>・なお、表紙には放生市の写真が用いられていた。</p>
<b>1989（平成元）年</b>	
見出し	「歴史的遺産を商店街振興に 放生市活況」
開催日	10 月 7 日～11 日
出店店舗	<p>・総持寺通り振興会の商店、和歌山・奈良・岐阜などから来た露天商 80 軒余り</p> <p>（衣料品・陶器・どら焼き・ホットドック・たこ焼き・綿菓子・おもちゃ・金魚すくい等）</p>
市の様子について	<p>・9 日、10 日は晴天となり、活況であったという。</p> <p>・交通事情の変化を受け、生活必需品を購入する場から、「ショッピングを楽しむレクリエーションの場に変った」という指摘がなされている。</p>
備考	<p>・メインの記事のほかに、大市に休憩所を設置した女性の寄稿も掲載されており、当時の大市の様子を伝えている。</p> <p>・なお、昨年同様、表紙は放生市であったが、解説欄には「人出の多い割りに売れなかったとの声」とあったとし、小見出しも「時代が変われば客も変わる」とされている。</p>
<b>1990（平成 2）年</b>	
見出し	「客呼ぶ声にも歴史がこもる 『放生市』にぎわう」
開催日	10 月 7 日～11 日
出店店舗	<p>・総持寺通り振興会の商店、和歌山・奈良・岐阜などから来た露天商 52 軒</p> <p>（衣料品・履物・陶器・どら焼き・ホットドック・たこ焼き・綿菓子・おもちゃ・金魚すくい・苗木等）</p>
市の様子について	<p>・雨天が続いたため、客足もまばら。</p> <p>・10 日は「体育の日」でにぎわっていた。</p>
備考	<p>・記事中では、「放生市」について、その由来についても言及し、「歴史的遺産」としている。</p> <p>・昨年までと引き続き、客は店を覗くものの、買い物をする人は少ないと指摘している。</p>
<b>1991（平成 3）年</b>	
見出し	「路上のデパート『放生市』」

開催日時	10月7日～11日
出店店舗	・約60軒
備考	・記事は例年よりもかなり小さく、市の様子については、賑わっていたとされているのみ。
<b>1992（平成4）年</b>	
見出し	「放生市で商店街の活性化」
開催日	10月7日～11日
出店店舗	・総持寺通り振興会の商店、愛知、奈良、兵庫などから来た露天商 (衣料品・履物・陶器・どら焼き・ホットドック・たこ焼き・綿菓子・おもちゃ・金魚すくい・苗木等)
市の様子	・町外からの露天商は年々減少。 ・期間中は雨の日が多かったため、客足も少なく、露天商はがっかりしていた。 ・10日の「体育の日」は、スポーツ祭りなどの行事があったため、ショッピングを楽しむ人でにぎわった。
備考	・「雑具大市」などと呼ばれたこともあったが、古くからの呼び名である「放生市」を復活させることで、商店街の活性化を図っている旨が記されている。
<b>1994（平成6）年</b>	
見出し	「秋晴れのショッピング 『放生市』にぎわう」
開催日	10月～11日
出店店舗	・約60軒の露天 (植木・陶器・金物・衣料・おもちゃ・食料品等)
市の様子	・9日、10日は連休で好天に恵まれ、多くの買い物客でにぎわった。
備考	・添付された写真のキャプションには「売る人も買う人も長年のつきあいで会話がある」と記されており、客と見是側の交流をうかがわせる。 ・「近年地元商店もこの人手をビジネスチャンスととらえ積極性を見せるようになりました」とあり、総持寺通り協同組合による「まんだら村の陶芸家荒木義隆さん作の焼物チャリティー入札会」「チビッコ画家似顔絵展」「写真展」、門前そば協同組合による「初打ち門前そば」の出店などが客を集めたとされている。
<b>1995（平成7）年</b>	

見出し	「七〇〇年の歴史を伝えて 門前「放生市」にぎわう」
開催日	10月7日～11日
出店店舗	全国から集まった移動商業組合の露店 約60軒 (植木・陶器・おもちゃ、金物・衣料・食料品等)
市の様子	<ul style="list-style-type: none"> <li>・五日間好天に恵まれ、多くの買い物客で市は賑わった。</li> <li>・昔のような賑わいはないが、「植木苗など平素入手に困難なものには多くの客が集まって」いたとある。</li> <li>・総持寺通り協同組合による、「前総持寺祖院鷺見透玄老師の墨跡展」や「チビッコがかのおえかきてん」、門前そば協同組合の「新そば・門前そば」の出店があったという。</li> </ul>

(『広報もんぜん』をもとに筆者作成)

表1から明らかとなることをまとめる。まず、門前大市における売り上げの減少が挙げられる。『広報もんぜん』に初めて記事にされた当初から、放生市における売り上げの減少は起こっていたようで、賑わいはあるものの買い物をする客は少ないとの記述が多くみられる。また、「家族とのショッピングを楽しむ」「レクリエーションの場」などといった記述からもわかるように、門前大市がかつてのように日用品を大量に買い込む場ではなくなっているということが、この時点ではっきりと門前の人々に認識されていたようである。また、開催時期については、1987年から1995年までは少なくとも10月7日から11日の五日間の開催であり、曜日による日程の変更は行われていなかった。加え、1992年の記事から「放生市」の呼称が当時の頃から復活し、商店街の活性化が図られていたことがわかった。

以上の聞き取り結果、広報での記述から、かつて交通の便が悪かった門前の人々にとって、門前大市が、特に冬支度のための日用品購入の場として機能していたが、時代が下るにつれてその役割は変容し、遅くとも1987年ごろからはその役割の変容が門前の人々に認識されていたことがわかる。また、子供たちが楽しめるようなお祭りの側面を持っていたことが分かった。また、「大市はなくなった」という声も見受けられ、現在、そばまつりと同時に開催されている「門前大市」とかつての大市とは別物であると認識されていると考えられる。そこには、かつての大市と現在の大市との大きな性質の変容があったのではないかと考えられる。

#### 4. 門前大市の現在

前章の聞き取り調査を通した分析においても指摘をしたように、門前大市は現在では、「能登門前新そばまつり」と合同で行われており、その性格も大きく変容したと考えられる。以下では、現在の「能登門前新そばまつり&門前大市」に実際に参加して分かったこ

とを取り上げる。

追加調査で参加したのは、2018（平成 30）年 11 月 25 日日曜日に総持寺通りにて開催された「第 21 回能登門前新そばまつり&門前大市」である。天候は時々雨に降られたものの良好であり、多くの人でにぎわっていた。この調査では、出店する店舗の種類などを調べ、運営している方のお話を聞いた。開催日は 1 日のみであり、10 時よりそば販売が開始され、15 時までの開催であった。出店している店舗は 28 店舗であり、そのほとんどがそばやパンやお惣菜などといった飲食物であった。記録上の門前大市と比較すると、陶器や傘といった日用品を販売する店舗はみられず、店舗数については『広報もんぜん』にあった記録と比較して大幅に減少していた。

運営に携わる I さん（門前、男性、70 歳代）にお話を伺ったところ、大市に参加している人たちは一部の総持寺から流れてくる観光客を除いては、基本的にかつてと変わらず、地元の人々が多く、地元のお年寄りや帰省中の子供たちがやってくるそうで、道行く人々の中に「知らない人はいない」ともおっしゃっていた。一方で、出店側は大きく変わったという。かつては、全国から行商人が集まり、トラックで寝泊まりしながら参加していたが、商品が売れなくなると、来なくなり、現在では金沢や福井、輪島といった近郊からやってくるのだという。また、第二節において記述したような店を出すにあたっての、「通知書」や店賃といったものは今ではないとのことであった。また、出店店舗の変化については、かつては日用品が主であったものの、ホームセンターや車の普及などによって、わざわざ大市に出向いてまとめて購入する必要がなくなったために食べ物や遊びを中心としたものになったのではないかとのことであった。なお、能登半島地震が発生した 2007（平成 19）年にも門前大市は開催されたそうである。「能登門前新そばまつり」と「門前大市」が合同で行われるようになったのは 5 年ほど前のことで、最初 11 月に単独で開催されていた「能登門前新そばまつり」の日程に合わせる形で、以前は 10 月に開催されていた「門前大市」が 11 月に開催されるようになったそうである。また、金沢市在住の Y2 さん（男性）によると、今日に残る「門前大市」は賑わいの創出のために続けられており、その内容は大きく変更されているため、かつての「門前大市」と現在の「門前大市」は別物であるものの、名称はなじみがあるから残しているのではないかとのことであった。

会場を見学させていただいたところ、祭りの名前にもなっているそばの他にも、様々な食料品を扱うお店が並んでいた。地元中学校の PTA による出店も見られ、地元で根差したイベントであることがよく分かった。また、11 時からは門前高校吹奏楽部や輪島キリコ太鼓 絆など 5 つの団体によるステージアトラクションが行われていた。かつて大市の際には相撲やサーカスなどの見世物があつたわけであるが、今日では、より地元の人々による、発表の場として機能しているのではないかという印象を受けた。これは、門前大市の店舗だけではなく、その他のイベント的要素についても、時代を経て変容しているためではないかと考えられる。



写真 1 : 「能登門前新そばまつり & 門前大市」の様子  
(2018 年 11 月 25 日 筆者撮影)

## 5. 考察

以上の調査を踏まえると、「門前大市」では、出店店舗や開催時期、同時開催されるイベントにおいて大きな変容が見られる。まず、出店店舗については、確認することのできた資料中のデータによると、店舗数は年によっての変動が大きいこともあって一概に減少しているとは言えないものの、広報では一貫して人出があるものの売上げが伸びないことが強調されている。この背景にはたびたび指摘されてきたように交通事情の変化それに伴う生活スタイルの変化があるのだろう。このような風潮を受けて、追加の聞き取り調査で明らかになった通り、今日のように日用品の販売・全国の行商人による販売が門前大市においてされなくなったのは、売上げの減少によるものであると結論付けてもよいと考える。一方で、現在の門前大市では地元中学校の PTA の出店や地元団体のステージアトラクションへの参加に見られるように地域密着型になりつつある。これは、全国からの行商人の参加がなくなったことによる大市の出店側の賑わいの減少を地元民が補う形で盛り上げているとも考えられ、地域の人々同士の交流の場としての機能がさらに強まっているのではないかと推測できる。これは、もともと総持寺の行事を目的に集まった人々を対象にした市であったことを考えると大きな変容であると感じられる。なお、開催日程に着目すると、本来の放生会の日程とは現在では完全に分離しており、かつ、現在の日程は合同の「能登新そばまつり」に合わせたものである。このことから、宗教的な意味合いはその由来以外にはほとんどないといってもよく、その日程も今日では曜日によって変動するようになった。これは、人々がより参加しやすくなるようにするための工夫なのだと考えられる。その一方で、広報での記述にあるように、門前大市に関しては、歴史あるもの、「歴史的遺産」として門前の人々が考えているようである。これらを考え合わせると、開催時期や期間の変動がありつつも、「門前大市」というものに対し、門前の人々が愛着を持ってい

るゆえに、今日でも「門前大市」の呼称が、内容や役割の変容した今でも、改められることなく使われ続けているのであろう。

## 6. おわりに

今回の調査では門前大市の変遷及び現在についてまとめ、その変化の変化の在り方について考察を行った。時代の流れ、交通事情の変化を受けながらも続いてきた門前大市が今日までその名前を今日に伝えているのは、門前の人々の地域を大切にする気持ちがあったからに他ならないと調査を通じ、強く感じた。また、門前の皆さんは聞き取り調査や資料の閲覧、追加調査にとっても快く応じてくださった。「能登は優しや、土までも」今回お世話になった I さんに教えていただいた言葉である。まさにこの言葉を実感した調査であった。改めて、調査にご協力いただいた方々に御礼申し上げたい。